

韓国人日本語学習者及び日本語母語話者の 作文に現れた疑問文について*

— 「デスカ/マスカ」で終止する疑問文を中心に —

飯干和也**

(e-mail : iiho4@hotmail.com)

<目次>

- | | |
|---------------------|-------------|
| 1. はじめに | 5. 調査結果 |
| 2. 先行研究 | 5.1 量的分析結果 |
| 3. [デスカ/マスカ] 疑問文の特徴 | 5.2 用法の分析結果 |
| 4. 調査方法 | 6. まとめ |

キーワード：デスカ(-desu ka), マスカ(-masu ka), ダロウカ(-daro ka), 疑問文(interrogative sentences), 丁寧体(polite style)

1. はじめに

日本語学習者が書く作文には「文法に誤りはなくとも、どこか不自然さを感じさせる表現」が見受けられることがある。高橋・伊集院(2006)は、国立国語研究所(2001)『日本語学習者による作文と、その母語訳の対訳データベース ver.2.CD-ROM版』に収録された中国人日本語学習者が書いた作文の中に、次のような疑問文が見られることを指摘している。

- (1) CN015¹⁾ たばこを吸うのは権利ですか。(作文のタイトル)
- (2) CN065 たばこを吸う人は年年増えていくばかりです。たばこを吸う理由はなんですか。

* 본 연구는 2018년도 상명대학교 교내연구비를 지원받아 수행하였음.

** 상명대학교 부교수, 일본어교육학

1) 国立国語研究所(2001)で用いられている執筆番号。下線は筆者。

高橋・伊集院(2006:80)では、(1)(2)のような疑問文は「文法的には誤りでなくとも違和感があり、日本語母語話者による作文にはあまり見られないと思われる」と述べている。このような疑問文を中国人日本語学習者が書くことは、日本語教師の間で経験則として知られていたという。しかし、こうした疑問文が研究者によって考察されたことがなかったため、高橋・伊集院(2006)は中国人日本語学習者の作文を対象にして、[デスク/マスク]で終止する疑問文について考察した。

このような[デスク/マスク]で終止し、不自然さを感じる疑問文は韓国人日本語学習者の作文にも見られる。本稿は、韓国人日本語学習者(以下、KRと略記)²⁾が書いた作文を調査対象として、KRの疑問文の用い方について整理した後、[デスク/マスク]で終止する疑問文(以下、[デスク/マスク]疑問文)の特質を明らかにするものである。

ところで、このような[デスク/マスク]疑問文は、例えば、スピーチの原稿等であれば、違和感が無いと思われる。また、作文の文体が丁寧体ではなく、普通体であったならば、このような疑問文は現れないだろう。それ故、指導者が「文章のジャンル(スピーチの原稿なのか、意見文³⁾なのか)をよく考えて書くように」とか「作文は丁寧体ではなく普通体で書くように」と指導すれば、学習者が[デスク/マスク]疑問文を書くことは無くなるかもしれない。

しかし、「なぜ日本語学習者の作文に[デスク/マスク]疑問文が現れるのか」を解明しなかったならば、日本語教育学の知識基盤に空白地帯を生じさせることになる。こうした空白地帯は埋めていくべきであろうし、明らかになった事を学習者に還元することもできる。

日本語学習者が書く作文に不自然な[デスク/マスク]疑問文が現れるという事象からは「何故、そのような疑問文を書くのか」「学習者は読み手をどのように意識して、[デスク/マスク]疑問文を書いたのか」「学習者の母語によって読み手に対する意識のあり方は異なるのか」といった問題が提起される。こうした問題を解決していく上での端緒を担う論考として本稿の意義があると考ええる。

以上を踏まえて、本稿は、まずKRが書いた作文とJPが書いた作文を比較し、量的分析と用法の分析をして、疑問文の用い方に関する両者の異同を整理、考察する。そして、[デスク/マスク]疑問文に焦点を当て、その現れ方と用法上の特質を考察する。

2. 先行研究

[デスク/マスク]疑問文に焦点を当て日本語学習者の作文を調査・考察したものは管見の限

2) 併せて、以下、中国人日本語学習者をCN, 日本語母語話者をJPと略記する。

3) メイナード(2005)によれば「意見文」とは「書き手が自分の意見を伝え、読み手を説得することを目的としたディスコース」としている。本稿もこれに従う。

りて高橋・伊集院(2006)しかなく、KRの作文に限ったものは飯干(2018)だけである。考察を進める上での手がかりは決して多くない。そのため、本章では疑問文を含む、KRの作文に現れた文末形式を調査・分析した考察を概観する。これによりKRの作文に現れる[デスカ/マスカ]疑問文を考察する上での手がかりを提示してみたい。ここでは伊集院・高橋(2010)、張(2013)、飯干(2013)を取り上げる。

伊集院・高橋(2010)は、国立国語研究所(2001)『日本語学習者による作文と、その母語訳の対訳データベース ver.2.CD-ROM版』に収録された「喫煙に関する意見文」という作文を用いて、CN43編・KR169編・JP44編の作文に現れた文末形式をモダリティの種類別に分類し、モダリティ形式の用い方を比較した。その結果、CNは「『読み手に働きかける』モダリティ」(例:(よ)う、てくれ、なさい、べきだ、なくてはならない等)を多用する傾向があるのに対し、JPは「『書き手の内的思考を表す』モダリティ」(例:と思う、のだ、だろう、はずだ等)を多用すると言う。一方、KRはCNと同様な特徴を持つ場合とJPと同様な特徴を持つ場合があるという。具体的な例を挙げて説明すると「確認要求」や「行為要求」を表す文が作文に見られる点はCNと同様であるが、書き手の考えを表す文についてはJPの特徴と大きな差が無いと述べている。以下、伊集院・高橋(2010:18-25)よりKRの用例を示す。

- (3) KR168 すごい考えじゃないですか。 (確認要求)
- (4) KR012 世界、広く言えば人種の幸福のために、私たちががんばりましょう。 (行為要求)
- (5) KR030 だから家庭内ではタバコを吸わないほうがいいです。 (書き手の考え)

張(2013)は、伊集院・高橋(2010)と同じく国立国語研究所(2001)の「喫煙に関する意見文」をKRの作文に限って調査を行い、その結果をJPと比較した。これによるとKRは「みんなで禁煙しましょう」「(喫煙を)少し自制してほしい」「積極的な態度を見せてください」などの行為系のモダリティや「吸煙地域で吸うべきです」「タバコを規制してはいけません」「吸わない方がいいです」といった評価のモダリティを多用すると言う。また、JPが行為系のモダリティを「しかし、考えてみてください」のように、「作文展開上の思考プロセスに働きかける修辭的な呼びかけ」(張2013:314)として用いるのに対し、KRは実際の行動を呼びかけるために行為系のモダリティを用いるという質的な違いがあることを指摘している。そして、JPの作文には「喫煙量も勝手だと思うのです」「喫煙すべきではないのである」のような「のだ」で終止する説明のモダリティの使用が多いと指摘する。さらに、JPの作文はKRの作文より疑問形式の文が多く用いられたり、「推量」や「蓋然性」を表すモダリティ形式がバリエーションを持って用いられたりすることを指摘している。

飯干(2013)は「原子力発電の賛否」など8種類のテーマで書かれたKRによる作文112編を調査対象として、文末形式をモダリティの種類別に分類・分析した。その結果、「(よ)う/たい/てほしい」と

いったモダリティ形式を多用する、「のだ」等で表される説明のモダリティの使用が少ない、などのように張(2013)と同様の結果を示している。また、「べきだ／なければならない」などに代表される評価のモダリティは、JPが「べきだと思う／なければならないと思う」のように「と思う」を後続させることが多いのに対し、KRはモダリティの形式によって「と思う」が後続する文と後続しない文に傾向差があることを指摘した。

ここまでをまとめると、三者の考察は、JPの作文は「のだ」や「と思う」が多用され、KRの作文は「てほしい」「(よ)う」「ほうがいい」「べきだ」などの行為や評価のモダリティが多用されるという点が共通している。また、伊集院・高橋(2010)が指摘した「KRの作文には「確認要求」や「行為要求」を表す文が見られる」という点、そして、張(2013)が指摘した「JPが「(よ)う、てくれ」等のモダリティを作文展開上の思考プロセスに働きかける修辭的な呼びかけに用いるのに対し、KRは实际的な行動の呼びかけに用いる」という点を考慮すると、「JPは書き手が考える論理の有り様を前面に出すような書き方をし、KRは書き手が考える論理の正当性や当為性を前面に出すような書き方をする」と大まかにまとめられよう。

以上を踏まえ、次は学習者の作文に現れた疑問文に焦点を当てた考察を見る。高橋・伊集院(2006)は上述の「喫煙に関する意見文」(CN43編、JP44編)を調査に用いて、作文に現れた疑問文を分析した。その結果、CNの作文では、JPの作文に見られない[デスク/マスク]疑問文が多くの用法で用いられていたことを明らかにした。用例として次の文がある。〈 〉内は高橋・伊集院(2006:85-86)で示された用法の名称である。

- (6) CN006 たばこといったら、みんな何と思いますか。〈質問〉
- (7) CN070 その原因はどうですか。自分が自分を制御することができません。〈思考過程〉
- (8) CN048 たばこはほんとうにこういう作用がありますか。〈疑念〉
- (9) CN012 それもいいとは思いませんか。〈同意要求〉

高橋・伊集院(2006:83)は「データが少ないので確言はできないが、JPデータが日本語作文の規範であるとすれば、このような疑問文は異質である」と述べている。

飯干(2018)は「死刑制度の賛否」(KR84編)を用いて、KRが書いた作文に現れる疑問文を高橋・伊集院(2006)と同様な手法で分析した。その結果、KRの作文では[デスク/マスク]疑問文が〈疑念〉の用法に限って現れることを指摘した。

- (10) 人の人権をうばった人に人権が存在しますか。私は絶対にないと思います。
- (11) 犯罪者たちは現実に存在し、直接に被害をあげます。彼らに人権が必要ですか。
- (12) 他人の人権を踏みにじた者の人権を尊重しなければならぬ理由がありますか。

(10)～(12)の疑問文はどれも修辞疑問文であり「死刑囚には人権がない」という事を強く主張するために書かれている。この事象は、先にまとめた「KRは書き手が考える論理の正当性や当為性を前面に押し出すような書き方をする」という点と軌を一にしているように思える。つまり、KRの作文に現れる不自然な[デスカ/マスク]疑問文は、KRが作文を作成する際の特性と関わっていることが示唆されるのである。

しかし、学習者の作文に現れた疑問文に関する考察は質、量ともに十分ではなく、飯干(2018)が指摘したKRの作文には〈疑念〉の用法に限って[デスカ/マスク]疑問文が現れるという点についても本当にその通りであるか検証が必要であろう。このような考察の現状を更に進展させるためにも、本稿の意義は小さくないと考える。

3. [デスカ/マスク]疑問文の特徴

考察を進める前に[デスカ/マスク]疑問文とは、どのような特徴を持つ疑問文なのか、二つの理論を踏まえて整理してみたい。ここでは木村・森山(1992)が提唱した「聞き手情報配慮」の理論と Pech-Tyson(1998)が提唱したWriter/Reader visibilityを取り上げる。

木村・森山(1992)の論考とまとめると、「聞き手情報配慮」の理論において疑問文とは話し手には不確定な情報があり、それをはっきりさせるための情報を聞き手が保持しているとみなして聞き手に依存するのが「無標」とされる。これに対し、はっきりさせるための情報を聞き手に依存しない疑問文は「有標」であり、これを表す言語形式は日本語の場合、「だろう(か)」「かな」などを挙げることができる。次のような状況における疑問文を考えてみたい。

(AはBが時計を持っていない事を知っている)

(13) A: # 今、何時ですか。

(14) A: 今、何時でしょうか。



〈図1〉「聞き手情報配慮」の理論から見た疑問文

(13)は、不確定な部分の情報(現在時刻)を聞き手Bが保持しているとAが見なし、質問している。つまり、聞き手に情報を依存する疑問文だ。しかし、〈図1〉のように、Bが時計を持っておらず、Aもそれを知っている状況下では、(13)のように無標の疑問文で質問しても答えは得られず不適格になる。一方、有標の疑問文である(14)は不適格ではない。これは聞き手Bに質問しているのではなく、話し手A

が「ある情報について不確定な部分がある」という表明を行っているに過ぎないからだと考えられる。つまり、聞き手に情報を依存しない疑問文である。以下、高橋・伊集院(2006)を参考にして、(13)のように聞き手に情報を依存する疑問文を「聞き手依存疑問文」、(14)のように聞き手に情報を依存しない疑問文を「非聞き手依存疑問文」と呼ぶことにし、特に疑問文の形式に着目する場合は、前者を「(-)ダロウカ」、後者を「(+)ダロウカ」で表すことにする⁴⁾。

次にWriter/Reader visibility(以下、W/R visibility)はPech-Tyson(1998)が提唱した概念であり、「Chafe(1982,1985)が話し手の言葉の特徴として提案した“involvement”という概念とSmith(1986)が書き言葉における対人的要素(interpersonal component)の具現化として提案した言語表現の一覧とを参照したもの」(高橋・伊集院2006:86)である。高橋・伊集院(2006)では、これを援用してW/R visibilityを「書かれた文章において書き手や読み手の存在が言語表現として明示される度合い」と定義している。W/R visibilityの指標は言語によって様々であるが、日本語の場合、モダリティを表す言語形式が有力な手がかりになる。なぜなら、「「モダリティ」は書き手が命題の表す事柄をどのように捉え、読み手にどのように伝えるかという、文の述べ方を決定する働きを担うため」(高橋・伊集院2004:87)である。先述の例文「何時ですか」「何時でしょうか」にW/R visibilityを当てはめた場合、「何時ですか」は、[デスカ]で表される丁寧さは聞き手に向けられ、また、情報も聞き手に依存している。それに対し「何時でしょうか」は、丁寧さは聞き手に向けられるが、情報は聞き手に依存しない。つまり、[デスカ/マスカ]は[デショウカ]に比べ、聞き手の存在が言語表現として明示される度合いが高い(W/R visibilityが高い)ということになる。

以上のように、[デスカ/マスカ]疑問文は「丁寧さ」「聞き手への情報依存」という観点から見た時、高いW/R visibilityを持っていると特徴づけることができる。それでは、KRは作文において、このような特徴を持つ[デスカ/マスカ]疑問文をどのように用いるのであろうか。調査方法を示した後、分析していく。

4. 調査方法

考察には国立国語研究所が作成し、インターネット上に公開している「作文対訳データベース」(https://db3.ninjal.ac.jp/contr-db/essay_01.html)を利用した。この「作文対訳データベース」に収められた「たばこについてのあなたの意見文」という作文を調査に用いる。作文は

4) 「今、何時ですか」のような[デスカ/マスカ]疑問文は聞き手に情報を依存する疑問文なので、「聞き手依存疑問文/(-)ダロウカ」と表せる。「今、何時でしょうか」「今、何時かな」などは聞き手に情報を依存しない疑問文なので「非聞き手依存疑問文/(+)ダロウカ」と表せる。

KRが執筆したものが163編⁵⁾、JPが執筆したものが44編あった。1編あたりの字数はおよそ400～600字程度である。KRの学習歴は次の通りである。

〈表1〉 KRの学習歴と人数

学習歴	1年未満	1年以上～ 3年未満	3年以上～ 5年未満	5年以上	無回答	合計
人数(人)	31	78	45	3	6	163

調査の手順は次のように行った。まず、作文を1行1文に編集しなおす。次に疑問の終助詞「か」や「?」、疑問詞など疑問文のマーカ―をもつ文を抽出する。そして、抽出された疑問文を「聞き手依存疑問文」と「非聞き手依存疑問文」に分類する。また、伊集院・高橋(2006)を参考にして、疑問文の用法を考察した安達(2002)から五つの用法を採択し、前後の文脈を勘案しながら作文に現れた疑問文の用法を分類した。用法の分類は数日の間を置いて複数回にわたって行い、客観性の確保に努めた⁶⁾。以下、用法の説明と例を示すが、説明と例は筆者によるものである。

〈表2〉 疑問文の用法と例

〈質問〉	書き手には何らかの情報が欠けているために判断が成立しておらず、書き手が読み手に問いかけることによって、その情報を埋めようとする用法。 【例：以上が私の考えですが、 <u>みなさんはどう思いますか。</u> 】
〈同意要求〉	書き手の情報の捉え方が妥当であることの同意を読み手に求める用法。 【例：多くの人がたばこを吸って暮しているではないか。】
〈判断不明〉	その命題の真偽・選択あるいは補充すべき値について、書き手がまったく見当がつかない状態であるということを表す用法。 【例：たばこは本当に悪影響があるのだろうか。 <u>私には分からない。</u> 】
〈思考過程〉	判断が下せないという点で〈判断不明〉と共通するが、判断形成のための思考活動を示す用法。 【例：罰金刑が最も重い <u>処罰</u> だろうか。 <u>そうではないだろう。</u> 】
〈疑念〉	〈判断不明〉が判断が成立していないことを表すのにとどまり、〈思考過

5) 「作文対訳データベース」に採取されたKRの作文には、母国(韓国)で採取されたものと、日本で採取されたものがある。本稿は母国で採取された作文を調査に用いる。

6) 高橋・伊集院(2006)は著者二人が各自で分類作業を行い、その結果を照合することによって客観性を確保している。本稿はそれが出来なかったため、やむなく上記の手法を用いた。

程〉が判断形成への思考活動を表すのに対して、命題の成立を否定的に捉える気持ちが先行することを表す用法。

【例：全ての人がたばこをやめるだろうか。そんなことは絶対にない。】

以上のような調査手順を取り、量的分析と用法の分析を行った。次章では分析結果を示していく。

5. 調査結果

5.1. 量的分析結果

まず、量的分析の結果から見ていきたい。KRの作文には2791の文があり、そのうち疑問文は52文あった。JPの作文には715の文があり、疑問文は41文あった。作文の中で疑問文が占める割合はKRが1.86%、JPが5.73%であり、JPの作文に疑問文が多く使用されている事が分かる。これらの疑問文を執筆者と聞き手依存の有無でクロス集計すると、次表のようになる。


〈表3〉作文に現れた疑問文の聞き手依存の有無

	KR	JP	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	31	8	39
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	21	33	54
計	52	41	93

(単位:文)

〈表3〉を見ると、KRの作文には聞き手依存疑問文が多く現れ、反対にJPの作文には非聞き手依存疑問文が多く現れている。この違いが示すものを考えるためにカイ二乗検定を行ったところ、執筆者と疑問文の聞き手依存の有無には有意差が認められた($\chi^2(1)=15.1$, $p=.05$)。KRがJPに比して聞き手依存疑問文を多く用いるように見えるが、これには留意すべき点がある。疑問文が普通体である場合は、野田(1989)が言うところの「真性モダリティを持たない文」になり、「不確かな情報を聞き手に依存する」という疑問文の性質から解放されて、聞き手に依存しない疑問文になる⁷⁾。これを考慮して、KR・JPそれぞれごとに疑

7) 例えば「たばこは人々への迷惑になりますか。」は〈質問〉としてのみ機能するが、「たばこは人々への迷惑になるか。」は〈質問〉以外にも、〈思考過程〉〈判断不明〉〈疑念〉としても機能しうようになる。詳しくは、野田(1989)参照。

問文を普通体と丁寧体に分けて分類しなおすと〈表4〉〈表5〉のようになる。〈表4〉の  にある () 内の数字は10例が[デスク/マスク]疑問文であることを示す。

〈表4〉KRの作文に現れた疑問文の文体と聞き手依存の有無


	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	16	15(10)	31
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	10	11	21
計	26	26	52

(単位：文)


〈表5〉JPの作文に現れた疑問文の文体と聞き手依存の有無

	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	8	0	8
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	17	16	33
計	25	16	41

(単位：文)

〈表4〉，〈表5〉中の  が(-)ダロウカであるものの普通体なので「真性モダリティを持たず、聞き手に情報を依存しない疑問文(非聞き手依存疑問文)」である。

注目すべきはJPの結果だ。〈表5〉を見ると、JP作文には丁寧体の(-)ダロウカ形式の疑問文が1例もなく、(-)ダロウカ形式の疑問文は全て普通体であることが分かる。先述したように、普通体の疑問文は聞き手依存疑問文にならないので、JPの作文には聞き手依存疑問文が1例も無いことになる。

一方、KRの結果である〈表4〉を見ると、丁寧体の(-)ダロウカ形式の疑問文が15例ある事が分かる。データが多くないとは言え、JPが書いた作文が日本語作文の規範であるとすれば、〈表4〉中の  の疑問文は異質であるということが示唆される。つまり、ここに含まれる10例の[デスク/マスク]疑問文についても、その異質性が疑われるのである。

次に[デスク/マスク]疑問文を書いた執筆者の学習歴を見る。[デスク/マスク]疑問文10例は8名のKRが書いていた。

〈表6〉[デスク/マスク]疑問文を書いたKRの学習歴

執筆者	学習歴	執筆者	学習歴
KR042	44ヶ月	KR168	30ヶ月
KR126	32ヶ月	KR170	6ヶ月
KR127	44ヶ月	KR176	6ヶ月
KR129	8ヶ月	KR208	4ヶ月

学習歴が最も短い者は4ヶ月、最も長い者は44ヶ月であった。初級段階の学習者のみならず、かなり学習が進んだ学習者であっても、不自然な[デスク/マスク]疑問文を書いているという結果は非常に興味深い。

5.2. 用法の分析結果

次に用法の分析結果を見る。KRとJPの作文に現れた疑問文を用法別に分類すると〈表7〉のようになる。

〈表7〉 用法別に分類した疑問文の数

	KR	JP
〈質問〉	0	0
〈同意要求〉	2(1)	0
〈判断不明〉	0	0
〈思考過程〉	36(3)	30
〈疑念〉	10(5)	11
(分類不可)	4(1)	0
合計	52(10)	41

(単位：文)

* ()内は[デスク/マスク] 疑問文の数

KRの作文には誤字や文法の誤りによって、用法の分類ができないものが4例あった。KR、JPともに〈思考過程〉の用法が最も多く、続いて〈疑念〉の用法が多いことが分かる。また、若干ではあるがKRの作文には〈同意要求〉の疑問文も見られた。高橋・伊集院(2006)の考察ではCNの作文には〈思考過程〉〈疑念〉に加えて、「たばこといったら、みんな何と思いますか」のような〈質問〉や「それもいいとは思いませんか」のような〈同意要求〉の疑問文が見られることを指摘している。分類不可の用例を除き、高橋・伊集院(2006)と本稿の調査結果と比較すると、おおよそKRの疑問文の用い方はJPの疑問文の用い方とよく似ていると言えよう。ただし、〈同意要求〉の疑問文も見られる点を踏まえると、KRの作文は、「『読み手に働きかける』モダリティを多用する」(2章参照)というCNの作文と同様の特徴もやや有していると整理できる。また、〈表7〉を見て分かるように、[デスク/マスク]疑問文が全ての用法で現れている。これはKRの作文では[デスク/マスク]疑問文が〈疑念〉の用法に限って用いられると指摘した飯干(2018)と異なる結果になった。以下、用法別に詳しく用例を見ていく。

〈同意要求〉の用例は2例あった。1例が[デスク/マスク]疑問文であり、もう1例が[デショウ]

で終止する疑問文である。

- (15) KR168 私の国では女の人たちは外にたばこを吸わないです。その理由はとてもおかしいです。たんじゅんに男の人たちがいやだと思いますから。すごい考えじゃないですか。
- (16) KR136 私の知り合いや友だち、家族の中で多くの人がたばこを吸っていますが、その人のすべてがたばこをやめたいと思っています。でも、たばこをやめるのは本当に難しいことなんでしょう？

(15)は[デハナイカ]で終止する否定疑問文の一種として分類すべきものかもしれない⁸⁾。用例自体が多くなく、今回の考察は否定疑問文の用い方を主眼に据えないため、これ以上の考察は行わなかった。ただし、〈同意要求〉の疑問文がKRの作文に見られた点は注目しなければならない。何故ならば、このような疑問文はJPの作文には見られないからである。[デスカ/マスク]という形態の問題とは別に、用法の問題として今後更に検討していく必要がある。

次に、〈思考過程〉の用法を見ていく。KRとJPの作文に見られた〈思考過程〉の疑問文を文体と聞き手依存の有無でクロス集計したのが〈表8〉〈表9〉である。

〈表8〉 〈思考過程〉の疑問文の文体と聞き手依存(KR)

	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	12	4(3)	16
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	10	10	20
計	22	14	36

(単位：文)

〈表9〉 〈思考過程〉の疑問文の文体と聞き手依存(JP)

	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	7	0	7
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	11	12	23
計	18	12	30

(単位：文)

〈表8〉中の()内にある3例は[デスカ/マスク]疑問文であることを示す。以下、用例を見る。まず、KRによる[デスカ/マスク]疑問文ではない用例を示す。

8) 安達(1999)は[デハナイカ]と[ダロウカ]が持つ「確認要求(本稿における〈同意要求〉)」の用法について考察している。安達(1999)では確認要求における両形式の違いを「問いかけ性」の有無に求めている。詳しくは安達(1999:135-159)を参照。

(17) 【聞き手依存疑問文/(-)ダロウカ・普通体⁹⁾】

KR020 たばこは昔から多くの人々に愛用されてきた嗜好品である。そんなたばこがいまさらこのころになって問題になるのはなぜか。

(18) 【非聞き手依存疑問文/(+)ダロウカ・普通体】

KR239 青少年の喫煙のみならず女性の喫煙は、社会の問題になっている。では、たばこは人々にどんな影響を与えているのだろうか。

(19) 【非聞き手依存疑問文/(+)ダロウカ・丁寧体】

KR019 それにもかかわらず、たばこをすう人はふえているそうです。それはなぜでしょう。

(17)～(19)のように、[デスク/マスク]疑問文ではない疑問文は、どの用例も不自然さを感じさせるものではなかった。次に、[デスク/マスク]疑問文の3例を見てみる。KR042は2回、[デスク/マスク]疑問文を書いていた。

(20) 【聞き手依存疑問文/(-)ダロウカ・丁寧体】

KR042 経済学によって見ると、自分がタバコをすうことに関して、税金を納めているので、どこでもタバコをすうことはできます。しかし、なぜ、禁煙運動が盛んでいくのですか。自分の選択によって、自分の自由権利で、自分の金で税金を出します。誰が見ても、これは干渉するのはできませんが、公共の場所での喫煙は禁止されているのはなぜですか。私の思いはこのようなことです。

(21) KR129 テレビじゃないとしても映画などでたばこを吸うことをよくみます。このようなことはいかがですか。もちろんではない。たばこのコマーシャルがとくに子どもたちに悪いえいきょうを与えないと思います。

先述したとおり、JPの作文には[デスク/マスク]疑問文は見られず、聞き手依存疑問文が現れていない。JPの作文を規範とするならば、やはり(20)(21)は違和感がある疑問文であると言え、例えば、(20)の場合は「公共の場所での喫煙は禁止されているのはなぜでしょうか」などと書くのが自然だろう¹⁰⁾。

9) (-)ダロウカの形式なので聞き手依存疑問文に一応は分類されるが、先述したとおり、疑問文が普通体である場合は真性モダリティを持たないため、不確かな情報を聞き手に依存するという疑問文の性質から解除される。よって、(17)は聞き手依存疑問文ではない。

10) 韓国の大学に留学している日本人大学生2名に、このような[デスク/マスク]疑問文について、どのように思うか尋ねたところ「何となく変だ。『なぜでしょうか』などにするのが良いと思う」と答えた。

次に〈疑念〉の疑問文を文体と聞き手依存の有無でクロス集計すると、〈表10〉〈表11〉のようになる。

〈表10〉 〈疑念〉の疑問文の文体と聞き手依存(KR)

	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	4	5(5)	9
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	0	1	1
計	4	6	10

(単位：文)

〈表11〉 〈疑念〉の疑問文の文体と聞き手依存(JP)

	普通体	丁寧体	計
聞き手依存疑問文 / (-)ダロウカ	1	0	1
非聞き手依存疑問文 / (+)ダロウカ	6	4	10
計	7	4	11

(単位：文)

まず、KRが書いた[デスカ/マスク]疑問文ではない用例から見る。

(22) 【聞き手依存疑問文/(-)ダロウカ・普通体】

KR035 それでは あの人の そばにいて 病気に かかった人も 当然 あのの人に 訴訟するものか。とんでもない 主張で ある。

(23) 【非聞き手依存文/(+)ダロウカ・丁寧体】

KR229 次に『たばこのコマーシャルは子供に悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ』と言いますが、これはまちがっていると思います。たしかに、たばこのコマーシャルが青少年に悪い影響をあたえるかもしれませんが、そのためにコマーシャルをテレビで放送できなくするなら、今、テレビで放送できるプログラムはいくつのこののでしょうか。

「非聞き手依存疑問文/(+)ダロウカ・普通体」の疑問文は見られなかった。(22)はやや不自然に感じる疑問文であるが、これは「か」の直前にある形式名詞「もの」の誤用と考えられ、疑問文の使用に問題があるのではない。以上のように、[デスカ/マスク]疑問文ではない文については、特に不自然さを感じない。次に、[デスカ/マスク]疑問文の用例を見る。

- (24) 【聞き手依存文/(-)ダロウカ・丁寧体】
 KR126 それなのにだれにもたばこを吸う権利はあるはずだと言って、自分のこのみだけ考えてたばこを吸ったらどうしますか？一人、自分自身は満足だからそれで終りですか？あの、すみませんがちょっと週りを見てください。
- (25) KR127 が、たばこもコーヒーも嗜好品し、コーヒーも身体に悪い影響を与えるのは同じだと思いますが、なぜコーヒーは規則を作って禁止するのをしないですか。たばこは公共の場所では禁止するべきだと言ひし、コーヒーは構うというはおかしいと思います。
- (26) KR176 タバコを吸ってガンにかかる人はタバコの会社に訴るのにそれならばかんせつ吸煙によってガンにかかる人達はだれにその責任を聞かなきゃならないですか。その人達の論理どおりならばかんせつ吸煙者の被害は吸煙者達がおわなければならないです。
- (27) KR206 吸う人は知らないですがたばこの煙を吸う人々はだれに報賞をくれますか。

(24)～(27)は、やはり不自然に感じる疑問文である。注目すべき点はKRの作文に現れた〈疑念〉の疑問文10例のうち、5例が[デスカ/マスク]疑問文であるということである。〈思考過程〉では[デスカ/マスク]疑問文の出現率が11.1%(36例中4例)であったが、〈疑念〉での出現率は50.0%だ。用例の数自体が多くないので、安易な比較はできない。しかし、数字を見ただけでは〈疑念〉の用法に[デスカ/マスク]疑問文が現れやすい傾向が窺える。

飯干(2018)はKRの作文には[デスカ/マスク]疑問文が〈疑念〉の用法に限って現れると指摘した。本稿の調査結果では〈疑念〉の用法以外にも[デスカ/マスク]疑問文が現れ、飯干(2018)の考察とは異なる。しかし、「〈疑念〉の用法に[デスカ/マスク]疑問文が現れやすい」という傾向を飯干(2018)も本稿も導き出しているのではないかと考える。

6. まとめ

本稿は「たばこについてのあなたの意見文」というテーマで書かれたKRによる作文163編とJPによる作文44編を比較し、量的分析と用法の分析を加えて、両者の疑問文の用い方に関する異同を考察した。そして、KRの作文に現れた[デスカ/マスク]疑問文に焦点を当て、その様相を明らかにすることを目指した。

本稿では木村・森山(1992)が提唱した「聞き手情報配慮」の理論と Pech-Tyson(1998)が提唱したWriter/Reader visibilityを用いて、[デスク/マスク]疑問文の特徴を整理するとともに、安達(2002)を参考にして五つの疑問文の用法を設けた。これらの理論を考察の枠組みとして、KRとJPの作文を調査した。

量的分析の結果に関しては、まず、KRはJPに比して疑問文が占める割合が少ないことが確認できた。そして、[デスク/マスク]疑問文については10例の用例が確認され、これはKRの作文にだけ出現していて、その異質性を示した。また、[デスク/マスク]疑問文を書いた執筆者の学習歴は4～44ヶ月であり、学習歴の長短に関わらず、KRが[デスク/マスク]疑問文を書く実態を明らかにした。

用法の分析結果に関しては、KR・JP両者はほぼ同様に疑問文を用いていた。すなわち、〈思考過程〉の用法として疑問文を用いる場合が最も多く、〈疑念〉がそれに続いた。CNの作文に時として見られる〈質問〉の用法はJPはもちろん、KRにも見られなかった。ただし、KR作文にはJP作文で見られない〈同意要求〉の用法が2例見られた。これについては、KR作文とJP作文の差異と見ることも可能であろうが、用例が少ないため、更に考察していかなければならない。

また、[デスク/マスク]疑問文は〈同意要求〉〈思考過程〉〈疑念〉、つまり、KR作文で用いられた疑問文の用法の全てに現れていた。これは、KR作文では[デスク/マスク]疑問文が〈疑念〉の用法に限って現れると指摘した飯干(2018)とは異なる結果である。ただし、10例の[デスク/マスク]疑問文のうち、半数に当たる5例は〈疑念〉の用法において出現していた。飯干(2018)や本稿の結果を踏まえると、「KRの作文においては〈疑念〉の用法に[デスク/マスク]疑問文が現れやすい」と指摘することが可能であろう。

本稿では、なぜKRが[デスク/マスク]疑問文を書くのかという点については、考察できなかった。今後は用例数を更に増やして調査を行い、[デスク/マスク]疑問文が書かれる原因についても考えていきたい。

【参考文献】

- 安達太郎(2002)「第5章 質問と疑い」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, pp.174-202.
 飯干和也(2013)「韓国人学習者に日本語作文に見られる意見の述べ方について -文末のモダリティに注目して-」『日本語教育研究』第26輯, 韓国日語教育學會, pp.7-28.

- _____ (2018) 「韓国人日本語学習者の作文に現れた疑問文について-[デスク/マスク]で終止する疑問文を中心に-」 『日本語教育研究』 第 42 輯, 韓国日語教育学会, pp.85-98.
- 伊集院郁子・高橋圭子(2004) 「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility” -中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較-」 『日本語教育』 123, 日本語教育学会, pp.86-95.
- _____ (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ-日本・中国・韓国語母語話者の比較-」 『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』 36, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp.13-27.
- 泉子・メイナード(2005) 『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』 くろしお出版, pp.91-99.
- 木村英樹・森山卓郎(1992) 「聞き手情報の配慮と文末形式-日中両語を対照して-」 『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』 くろしお出版, pp.3-43.
- 高橋圭子・伊集院郁子(2006) 「疑問文に見られる“Writer/Reader visibility” -中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較-」 『日本語教育』 130, 日本語教育学会, pp.80-89.
- 張希朱(2013) 「韓国人日本語学習者と日本語母語話者の意見文における文末形式の比較」 『日語日文學研究』 第 85 号 1 卷, 韓國日語日文學會, pp.305-321.
- 野田尚史(1989) 「真性モダリティをもたない文」 『日本語のモダリティ』 くろしお出版, pp.131-157
- Chafe, W. (1982) Integration and involvement in speaking, writing, and oral literature. In Tannen, D.(ed.) *Spoken and Written Language: Exploring Orality and literacy*. Norwood: Ablex, pp.35-53.
- Chafe, W. (1985) Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In Oblson, D., Hildyard, A., and Torrance, N. (eds.) *literacy, Language, and Learning*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.105-123.
- Petch-Tyson,S. (1998) Writer/Reader visibility in EFL written discourse. In Granger, S. (ed.) *Leaner English on Computer*. London and New York: Longman, pp.107-118.
- Smith,E.L.(1986) Achieving impact through the interpersonal component. In Courture, B.(ed.) *Functional Approaches to writing*. London: Printer, pp.109-119.

논문 투고 일자 : 2018. 12. 27.
논문 심사 일자 : 2019. 01. 31.
계재 확정 일자 : 2019. 02. 01.

＜要旨＞

韓国人日本語学習者及び日本語母語話者の作文に現れた疑問文について
 — 「デスカ/マスカ」で終止する疑問文を中心に—

飯干和也

本稿は韓国人日本語学習者(以下、KR)と日本語母語話者(以下、JP)が書いた「たばこについてのあなたの意見文」という日本語作文を調査対象とし、作文に現れた疑問文の用い方について量的分析と用法の分析を行い、両者の異同を考察したものである。そして、[デスカ/マスカ]で終止する疑問文(以下、[デスカ/マスカ]疑問文)に焦点を当て、[デスカ/マスカ]疑問文の現れ方と用法上の特質を考察した。まず、量的分析の結果としては、1.KRはJPに比べて疑問文を用いる割合が低い。2.[デスカ/マスカ]疑問文は10例の用例がKRの作文にのみ現れ、その用例は全て不自然である。3.[デスカ/マスカ]疑問文を書いたKRの学習歴は4～44ヶ月であった。次に、用法の分析の結果としては、1.KRとJPが作文で書いた疑問文の用い方は、おおよそ同様である。2.KRの作文に現れた[デスカ/マスカ]疑問文は、疑問文の全ての用法で出現していた。3.[デスカ/マスカ]疑問文は「命題の成立を否定的に捉える気持ちを表す」用法において、特に出現しやすい傾向があった。今後は、KRがなぜ不自然な[デスカ/マスカ]疑問文を書くのかなどについて考察していきたい。

Interrogative Sentences Appearing in Essays by Korean Students of Japanese
 and Native Japanese Speakers

With a focus on interrogatives ending with “-desu ka” or “-masu ka”

Iihoshi, Kazuya

This article considers the differences and similarities among Korean students of the Japanese language (hereafter, “KR”) and native Japanese speakers (hereafter, “JP”) using both quantitative and usage analysis of interrogative sentences in essays they wrote in Japanese on the topic of “Your Opinion on Tobacco.” The focus was on interrogative sentences ending with “-desu ka” or “-masu ka” (hereafter, “-desu ka/-masu ka interrogatives”), examining the characteristics of how these -desu ka/-masu ka interrogatives were expressed and used. First, the quantitative analysis results showed that 1: KR used interrogatives less frequently than JP; 2: ten examples of -desu ka/-masu ka interrogative usage were seen in KR essays only, all of which were unnatural; 3: the KR students who wrote these -desu ka/-masu ka interrogatives had been learning Japanese for between 4 and 44 months. Next, the usage analysis results showed that 1: interrogatives were used by KR and JP in essentially the same way; 2: the -desu ka/-masu ka interrogatives seen in KR essays were found in all three classifications of interrogatives; 3: -desu ka/-masu ka interrogatives tended to be found most commonly in the usage where the writer was expressing a negative development of the proposition. Future studies will need to examine why KR use unnatural -desu ka/-masu ka interrogatives.